作成日	2024 年 6 月 29 日
専攻名	英文学専攻

教育・学習

1．現状分析

自己評価（S・A・B・C

評価項目① **達成すべき学習成果を明確にし、教育・学習の基本的なあり方を示していること。** ＜評価の視点＞ ・学位授与方針において、学生が修得すべき知識、技能、態度等の学習成果を明らかにしているか。また、教育課程の編成・実施方針において、学習成果を達成するために必要な教育課程及び教育・学習の方法を明確にしているか。 ・上記の学習成果は授与する学位にふさわしいか。
参照資料 ・学位授与方針 ・教育課程の編成・実施方針 ・その他参照した資料（　　）

【現状分析】

「文学研究科 学位授与の方針」と「英文学専攻 学位授与の方針」において、英文学、米文学、英語学、英語教育などの分野における高度な専門的知識、および豊かな英語コミュニケーション能力と高度な専門的知識を活用・応用する専門的能力、そしてそれらを統合的に活用してグローバルな社会に対応できるコミュニケーション能力を修得すべきことを明示している。また、「文学研究科 教育課程編成・実施の方針」と「英文学専攻 教育課程編成・実施の方針」において、学位授与の方針に示す能力を修得するための教育課程及び教育・学習の方法として、博士前期課程における「演習」と「特論」の科目と博士後期課程における「特殊研究」の科目にて領域ごとの専門知識と幅広い学識を養い、さらに後期課程では論文作成に特化した「研究指導」を行うことを明示している。

自己評価（S・A・B・C

評価項目② **学習成果の達成につながるよう各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成していること。** ＜評価の視点＞ ・学習成果の達成につながるよう、教育課程の編成・実施方針に沿って授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。 ※　具体的な例 ・授与する学位と整合し専門分野の学問体系等にも適った授業科目の開講。 ・各授業科目の位置づけ（主要授業科目の類別等）と到達目標の明確化。 ・学習の順次性に配慮した授業科目の年次・学期配当及び学びの過程の可視化。
参照資料 ・大学院要覧 ・シラバス ・学修行動調査の学修時間に関する設問（大学院） ・大学院開講科目数・開講率 ・その他参照した資料（　　）

【現状分析】
教育課程編成・実施の方針に基づき、英文学、米文学、英語学、英語教育を主たる柱として、各分野における高度な専門的知識を身につけ、それを活用・応用できるよう、「演習」、「特論」そして「特殊研究」と「研究指導」から成る体系的な教育課程を編成・実施している。博士前期課程では、少人数でのテクストの読解実践を行う「演習」と専門領域について幅広い学識を涵養する「特論」の科目により研究能力、そして高度の専門的な職業を担うための能力の確立を目指す。「演習」と「特論」の履修については、偏りが生じないようそれぞれ必修最低単位数を定め、『大学院要覧』にそのことを明示している。また、前期課程２年次にはそれまでの教育・学習の総括として修士論文作成を配置している。博士後期課程では、「特殊研究」と「研究指導」により専門知識とその応用能力を発展させ、研究者として自立して研究活動を行うに足る、高度の専門的研究能力の確立を目指す。学位授与の方針と、配置している授業科目との関連については、入学時オリエンテーションにおいて解説している。

自己評価：(S)・A・B・C

評価項目③
課程修了時に求められる学習成果の達成のために適切な授業形態、方法をとっていること。また、学生が学習を意欲的かつ効果的に進めるための指導や支援を十分に行っていること。
＜評価の視点＞
・授業形態、授業方法が学部・研究科の教育研究上の目的や課程修了時に求める学習成果及び教育課程の編成・実施方針に応じたものであり、期待された効果が得られているか。
・ＩＣＴを利用した遠隔授業を提供する場合、自らの方針に沿って、適した授業科目に用いられているか。また、効果的な授業となるような工夫を講じ、期待された効果が得られているか。
・授業の目的が効果的に達成できるよう、学生の多様性を踏まえた対応や学生に対する適切な指導等を行い、それによって学生が意欲的かつ効果的に学習できているか。
※　具体的な例
・学習状況に応じたクラス分けなど、学生の多様性への対応。
・単位の実質化（単位制度の趣旨に沿った学習内容、学習時間の確保）を図る措置。
・シラバスの作成と活用（学生が授業の内容や目的を理解し、効果的に学習を進めるために十分な内容であるか。）。
・授業の履修に関する指導、学習の進捗等の状況や学生の学習の理解度・達成度の確認、授業外学習に資するフィードバック等などの措置。

参照資料
・シラバス
・授業アンケート
・学修行動調査（大学院）
・卒業時アンケート（大学院）
・その他参照した資料（　令和４年度 FD 大学院修了者アンケート集計結果　　）

【現状分析】
- 少人数授業を実施し、学生の関心や理解度に応じた授業運営を行っている。また実際の受講学生に合わせてシラバスを最適化し、それを受講学生に提示し、効果的な教育と学習ができるようにしている。
- 博士前期課程 2 年次、および博士後期課程 2、3 年次の授業については、在籍学生の研究テーマに合わせた内容や教材を選び、「令和 4 年度 FD 大学院修了者アンケート集計結果」にも表れ

ているように、適切な学習や研究により質の高い成果（学位論文）が作成できるよう対応している。

- 授業担当者間で専攻の科目のシラバスを参照し合い、必要な専門分野の知識に過不足が生じないよう授業内容と実施方法の調整を行っている。
- 最近 5 年間の専攻修了学生がいないため、修了時のアンケートは実施されていないが、各授業のアンケートおよび学生への聞き取りにより、授業内容及び実施方法について検証し、改善を行っている。

自己評価：S・(A)・B・C

評価項目④ **成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っていること。** ＜評価の視点＞ ・成績評価及び単位認定を客観的かつ厳格で、公正、公平に実施しているか。 ・成績評価及び単位認定にかかる基準・手続（学生からの不服申立への対応含む）を学生に明示しているか。 ・既修得単位や実践的な能力を修得している者に対する単位の認定等を適切に行っているか。 ・学位授与における実施手続及び体制が明確であるか。 ・学位授与方針に則して、適切に学位を授与しているか。
参照資料 ・シラバス ・授業アンケート ・各科目の成績分布 ・学修行動調査の成績評価に関する設問（大学院） ・各種会議の議事録等 ・その他参照した資料（　　）

【現状分析】

- 成績評価の方法と評価の観点を各授業のシラバスに明記している。また、教員間で授業シラバスを閲覧し適切であるか確認し、専攻主任および教務課に報告することで管理している。
- 各授業のアンケートおよび学生への聞き取りにより、成績評価に関する問題の有無を確認している。

自己評価：S・(A)・B・C

評価項目⑤ **学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価していること。** ＜評価の視点＞ ・学習成果を把握・評価する目的や指標、方法等について考えを明確にしているか。 ・学習成果を把握・評価する指標や方法は、学位授与方針に定めた学習成果に照らして適切なものか。 ・指標や方法を適切に用いて学習成果を把握・評価し、大学として設定する目的に応じた活用を図っているか。
参照資料 ・卒業時アンケート（大学院） ・学修行動調査（大学院） ・その他参照した資料（　京都女子大学大学院学位論文の審査に関する申し合わせ　　）

【現状分析】

- 最近 5 年間に専攻修了学生がいないため、修了時のアンケートは実施されていないが、各授業のアンケートおよび学生への聞き取りにより、各授業での学習成果の評価に問題がないか確認している。
- 学位授与に直接関わる学習成果の評価においては、「京都女子大学大学院学位論文の審査に関する申し合わせ」に基づき、複数の専攻教員により論文を審査し、また口頭での質疑応答を経て、学位授与方針に定めた基準を満たしているか確認を行っている。またそのことにより、学習成果の把握と評価の指標や方法の正当性を検証している。

自己評価：S・(A)・B・C

評価項目⑥ **教育課程及びその内容、教育方法について定期的に点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいること。** ＜評価の視点＞ ・教育課程及びその内容、教育方法に関する自己点検・評価の基準、体制、方法、プロセス、周期等を明確にしているか。 ・課程修了時に求められる学習成果の測定・評価結果や授業内外における学生の学習状況、資格試験の取得状況、進路状況等の情報を活用するなど、適切な情報に基づいているか。 ・外部の視点や学生の意見を取り入れるなど、自己点検・評価の客観性を高めるための工夫を行っているか。 ・自己点検・評価の結果を活用し、教育課程及びその内容、教育方法の改善・向上に取り組んでいるか。
参照資料 ・過年度自己点検評価シート ・卒業時アンケート（大学院） ・進路就職状況 ・過年度の FD の取組企画と振り返りシート ・各種会議の議事録等 ・その他参照した資料（ 令和 4 年度 FD 英文学専攻 大学院改革アンケート結果報告　　）

【現状分析】

- 年度ごとに自己点検評価シートを作成することで点検を行い、その結果を教員間で共有し、教育課程や教育方法に関する問題がないか確認している。
- 近年在籍学生がいない年度が多いため、学生の状況を恒常的に把握し分析検討することができていないが、令和 4 年度大学院 FD として文学研究科英文学専攻の修了者を対象としたアンケートを実施し、その結果を教員間で共有して意見交換を行い、教育課程や教育方法の点検を行った。

２．分析を踏まえた長所と問題点

【長所】

専攻に在籍する大学院生が少ないため、学生の関心やテーマに最適な授業内容と実施方法を提供し、きめ細かい指導が実施できている。

【問題点】
近年、大学院生が在籍していない年度もあるため、学生の意見や実態を反映させた検証を継続的に実施できておらず、学生の確保が教育課程の点検の観点からも課題となっている。

３．改善・発展方策

【改善・発展方策】
適切な教育課程の設定の観点からも実際の学生の関心や学習状況を把握しておく必要があり、恒常的に大学院生が在籍している状況を作り出すことが急務である。「学生受け入れ」の項でも述べるが、令和 4 年度大学院 FD として文学研究科英文学専攻の修了者を対象としたアンケートを実施、また令和 5 年度大学院 FD として、学部 2 回生を対象に大学院進学と関心のある学問領域を問うアンケートを実施した。それらの結果は「令和 4 年度 FD　大学院修了者アンケート集計結果」、「令和 4 年度 FD　英文学専攻　大学院改革アンケート結果報告」および「令和 5 年度 FD　学部 2 回生対象意識調査アンケート　結果報告」にまとめたが、それらを分析し、教育課程の改革を予定している。令和 7 年度に文学部英語文化コミュニケーション学科の新カリキュラムを導入するため、それと連動させて令和 11 年度から文学研究科英文学専攻でも新しいカリキュラムに変更する。令和 8 年度から 10 年度に学部カリキュラム改訂の結果を検証しながら、大学院生を確保できる教育課程の見直しを実施する。

学生の受け入れ

１．現状分析

自己評価（S）A・B・C

評価項目① **学生の受け入れ方針に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や運営体制を適切に整備し、入学者選抜を公平、公正に実施していること。** ＜評価の視点＞ ・学生の受け入れ方針は、少なくとも学位課程ごと（学士課程・修士課程・博士課程）に設定しているか。 ・学生の受け入れ方針は、入学前の学習歴、学力水準、能力等の求める学生像や、入学希望者に求める水準等の判定方法を志願者等に理解しやすく示しているか。
参照資料 ・学生の受け入れ方針 ・各種会議の議事録等 ・その他参照した資料（　　）

【現状分析】
「大学院　入学者受け入れの方針」と「文学研究科英文学専攻　入学者受け入れの方針」において、学位授与の方針及び教育課程編成・実施の方針に基づく教育を受けるための条件として、博士前期課程と博士後期課程それぞれで、英語学英米文学分野における専門的知識を有するとともに、それらに関する能力にもすぐれた人材を受け入れることを明示している。

自己評価：S・(A)・B・C

評価項目③ **学生の受け入れに関わる状況を定期的に点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいること。** ＜評価の視点＞ ・学生の受け入れに関わる事項を定期的に点検・評価し、当該事項における現状や成果が上がっている取り組み及び課題を適切に把握しているか。 ・点検・評価の結果を活用して、学生の受け入れに関わる事項の改善・向上に取り組み、効果的な取り組みへとつなげているか。
参照資料 ・大学院入試志願者推移 ・各種会議の議事録等 ・その他参照した資料（　「令和 4 年度 FD 大学院修了者アンケート集計結果」、「令和 4 年度 FD 英文学専攻 大学院改革アンケート結果報告」、「令和 5 年度 FD　学部 2 回生対象意識調査アンケート 結果報告」　　）

【現状分析】

令和 5 年度に英文学専攻在籍の大学院生はおらず、令和 6 年度には博士前期課程に 1 名が在籍している。定員を満たしていない状況が長く続いており、その状況改善が必要である。令和 4 年度と令和 5 年度には、大学院 FD として英文学専攻の修了者や学部 2 回生にアンケートを実施し、学生の視点から求められる専攻のあり方を調査し、大学院生を確保できる教育課程や受け入れに関わる制度を改善するための取り組みを行っている。

２．分析を踏まえた長所と問題点

【長所】

英文学専攻では、年二回の一般選抜に加え、学内推薦など様々な入試を実施しており、より広く適切な人材を受け入れるための制度を設けている。

【問題点】

定員を満たしていない状況が長く続いており、教育課程の改善も含め学生の受け入れに関わる事項の改善が必要な状態である。

３．改善・発展方策

【改善・発展方策】

学生定員を充足できていない問題点を改善するため、教育課程の改訂を計画的に実行する。「教育・学習」の項でも触れたが、令和 4 年度大学院 FD として文学研究科英文学専攻の修了者を対象としたアンケートを実施、また令和 5 年度大学院 FD として、学部 2 回生を対象に大学院進学と関心のある学問領域を問うアンケートを実施した。それらの結果を分析し、学生が関心を持つ授業内容や授業方法を取り入れた教育課程の改革を予定している。また、同様の問題を抱えている文学部英語文化コミュニケーション学科が令和 7 年度より新カリキュラムを導入するため、その改訂の効果や問題点を検証しながら、令和 8 年度から 10 年度に大学院の新しいカリキュラムを策定する。英語文化コミュニケーション学科の改革と連動させて、令和 11 年度から英文学専攻も新しいカリキュラムに変更することで、学生を確保できるようにする。

教員・教員組織

１．現状分析

自己評価：(S)・A・B・C

評価項目①

教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を安定的にかつ十全に展開できる教員組織を編制し、学習成果の達成につながる教育の実現や大学として目指す研究上の成果につなげていること。

＜評価の視点＞

・大学として求める教員像や教員組織の編制方針に基づき、教員組織を編制しているか。

※具体的な例

・科目適合性を含め、学習成果の達成につながる教育や研究等の実施に適った教員構成。

・各教員の担当授業科目、担当授業時間の適切な把握・管理。

・教員は職員と役割分担し、それぞれの責任を明確にしながら協働・連携することで、組織的かつ効果的な教育研究活動を実現しているか。

・授業において指導補助者に補助又は授業の一部を担当させる場合、あらかじめ責任関係や役割を規程等に定め、明確な指導計画のもとで適任者にそれを行わせているか。

参照資料

・教員組織の編成方針

・各種会議の議事録等

・その他参照した資料（　　）

【現状分析】

「英文学専攻 教育課程編成・実施の方針」に基づいて、英文学、米文学、英語学、英語教育のそれぞれの分野において開設科目の「演習」、「特論」そして「特殊研究」および「研究指導」を担当するにふさわしい研究業績と教育能力を有する教員構成となっている。また、毎年の FD やカリキュラム検討会議等により、各科目の担当状況と科目の適合性を確認している。

自己評価：(S)・A・B・C

評価項目②

教員の募集、採用、昇任等を適切に行っていること。

＜評価の視点＞

・教員の募集、採用、昇任等に関わる明確な基準及び手続に沿い、公正性に配慮しながら人事を行っているか。

・年齢構成に著しい偏りが生じないように人事を行っているか。また、性別など教員の多様性に配慮しているか。

参照資料

・教員の性別・年齢構成

・各種会議の議事録等

・その他参照した資料（　　）

【現状分析】

専攻教員の募集、採用、昇任については、全学および文学研究科の規定・基準に従い適切に行っている。採用と昇任については、専門領域の審査委員に、他分野・他領域の審査委員も加え、審査委員会を作り、複数の立場から資格審査を行っている。また、構成教員の年齢や性別に著しい偏りが生じないよう、長期的な計画を立てて配慮している。

自己評価：S・A・(B)・C

評価項目③
教育研究活動等の改善・向上、活性化につながる取り組みを組織的かつ多面的に実施し、教員の資質向上につなげていること。
＜評価の視点＞
・教員の教育能力の向上、教育課程や授業方法の開発及び改善につなげる組織的な取り組みを行い、成果を得ているか。
・教員の研究活動や社会貢献等の諸活動の活性化や資質向上を図るために、組織的な取り組みを行い、成果を得ているか。
・大学としての考えに応じて教員の業績を評価する仕組みを導入し、教育活動、研究活動等の活性化を図ることに寄与しているか。
・教員以外が指導補助者となって教育に関わる場合、必要な研修を行い、授業の運営等が適切になされるよう図っているか。

参照資料
・過年度の FD の取組企画と振り返りシート
・学修行動調査（大学院）
・卒業生アンケート（大学院）
・各種会議の議事録等
・その他参照した資料（　　）

【現状分析】
専攻構成教員同士任意で研究成果を提示し合い授業方法に関する意見交換等を行っているが、FD としては、最近 2 カ年は教育課程見直しの取り組みであったため、組織的に教育研究活動改善の取り組みを行っていない。

自己評価：(S)・A・B・C

評価項目④
教員組織に関わる事項を定期的に点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいること。
＜評価の視点＞
・教員組織に関わる事項を定期的に点検・評価し、当該事項における現状や成果が上がっている取り組み及び課題を適切に把握しているか。
・点検・評価の結果を活用して、教員組織に関わる事項の改善・向上に取り組み、効果的な取り組みへとつなげているか。

参照資料
・各種会議の議事録等
・過年度自己点検評価シート
・その他参照した資料（　　）

【現状分析】
専攻教員の組織について、年度ごとに専門領域と授業担当および授業開講の状況を確認し、学位授与を保証できる教育課程を維持できるよう短中期計画を作成し、それに基づいて点検を行っている。現在、令和 11 年度に向けて教育課程の改善の計画を立てており、教員組織の編成についてもその計画に従う予定である。

２．分析を踏まえた長所と問題点

【長所】

英文学専攻の教育課程を高い質で運営できる教員構成である。また、その募集、採用、昇任は適切に実施されている。

【問題点】

最近 2 カ年における教育研究活動改善の取り組みは、構成教員有志の自発的な実施に留まり、組織として定期的な活動を行っておらず、継続的な点検や改善を専攻全体で実施する制度を作ることが課題である。

３．改善・発展方策

【改善・発展方策】

文学部英語文化コミュニケーション学科のカリキュラム改訂にて、授業の実施方法についても組織的な改善を行うことになった。大学院の授業でも、より効果的な授業実施方法を検討するため、令和 6 年度 FD として、問題解決型の授業形態を導入するための事例研究会を実施する計画である。また、来年度以降も教育研究活動改善の取り組みを継続的に実施できるようにする。